

# 岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状と課題

Some issues of dance classes in junior high school in Gifu prefecture

熊谷佳代<sup>1)</sup>・中川裕紀子<sup>2)</sup>

Kayo KUMAGAI and Yukiko NAKAGAWA

1) 岐阜大学教育学部保健体育講座

2) 滋賀県彦根市立金城小学校

## I. はじめに

平成20年の学習指導要領（文部科学省2008）の改訂により、中学校の保健体育科ではこれまで第1学年で「武道」又は「ダンス」のいずれかを選択とし、それ以外を必修としていたことを改め、全ての領域を第1学年及び第2学年において履修させ、選択の開始時期を第3学年とした。生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、多くの領域の学習を十分させることが望ましい時期として、小学校高学年との接続を踏まえて第1学年及び第2学年において全領域が必修となったのである。これまでは、男子が武道を選択し、女子はダンスというイメージが強かったが、平成24年度から新指導要領は完全実施となり、男女必修でダンスを履修することとなった。教員自身のダンス経験の有無に関係なくダンスを指導しなければならないといった現実を教員は突き付けられることとなった。

中学校保健体育科におけるダンス領域は、従来の「創作ダンス」「フォークダンス」に加えて平成10年の改訂から「現代的なリズムのダンス」が導入された。中村（2010）の東京都の公立中学校を対象とした調査によると、平成21年度の新学習指導要領先行実施期間において、現代的なリズムのダンスが最も多く行われており、必修化後は生徒の興味関心が高い現代的なリズムのダンスの採択率が高くなると報告されている。しかし、学習内容に誤解があるため、学習の質が十分確保できているとは言えず、教員の指導力養成、指導体制の強化が急務であることが示唆された。

一部マスコミの誤った報道により、中学校ではヒップホップダンスが必修で行われるようになるとの誤解が生まれた。教員のなかにはステップを覚えて踊れなければ教えられないという思いを持った者も多いようである。

小・中・高12年間の運動を意識し、何をいつどのように教えるのか、表現運動・ダンスの指導を担う教員の役割は大きい。

また、教員養成に関わる大学としては、確かな力を身につけた学生を教育現場に送り出すことができるように、大学における表現運動・ダンスの授業内容の見直しと、ダンス必修化となった現場の指導の実態や現職教員の意識等について調査し今後に向けての課題を明らかにすることが急務である<sup>2)</sup>。

そこで、本研究では新学習指導要領の完全実施となった平成24年度について、岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状と教員の意識について調査し、今後の課題を明らかにすることとした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

岐阜県公立中学校（187校）の保健体育教員を対象とした。

### 2. 調査方法・期間

郵送法による質問紙調査を行い、平成24年11月5日にアンケート用紙を一斉に郵送し、回答期間を11月末日までとした。

### 3. 調査内容

表1に示すとおり、基礎調査（6項目）、実

態調査（6項目）、意識調査（3項目）の14項目から成る調査項目を作成した。作成にあたっては中村（2009, 2010）の先行研究を参考にした。

#### 4. アンケート回収率

127校、189名の体育教員から回答を得ることができた。アンケート回収率は67.9%であった。

#### 5. 分析方法

調査項目毎の回答総数を有効回答とし分析対象とした。項目間の比較については、欠損値のある回答を除外した。

表1 調査内容

項目	内容
基礎調査	性別, 年齢, 専門スポーツ種目, ダンス経験, ダンス指導経験年数
実態調査	授業実施の有無, クラス編成, 年間配当時間, 実施ダンス種目, 採択理由, 授業内容
意識調査	指導の難しさ, 要望, 成果と課題 (自由記述)

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 対象の特性

##### 1-1. 性別

性別は、男性教員147名（78%）女性教員42名（22%）であり、男子教員が約8割を占めていた。

##### 1-2. 年齢

年齢は、20代が46人（24%）、30代が47人（25%）、40代が52人（28%）、50代が44人（23%）であった。年齢構成は20代から50代までほぼ同じ割合で構成されていた。

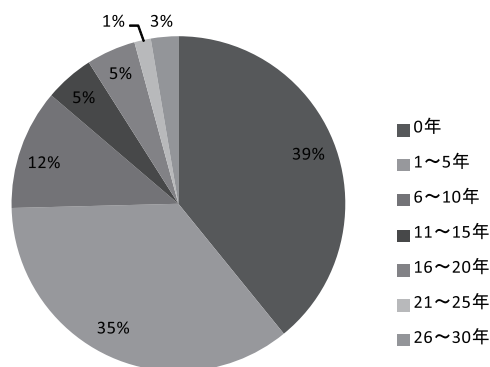


図1a 指導経験年数（創作ダンス）

#### 1-3. ダンス経験

大学時代のダンス経験については、大学時の授業履修も含めて経験が“あり”と回答した者は、134人（71%）、“なし”と回答した者は53人（28%）、不明が1名であった。この結果は、成瀬ら（2011）による愛知県の高校教員を対象とした調査報告とほぼ同じ数値であった。“なし”と回答した者を性別でみると、男性教員の約3割、女性教員の約1割が大学時にダンス経験がないことが明らかとなった。松本ら（1994）の調査によって大学時のダンス履修経験が1年以上の教員と1年未満の教員とでは、ダンス観や指導観、指導能力に違いが認められ、大学時における1年以上のダンス履修経験が指導実践に有効に働くことが示唆された。今回の調査では大学での履修期間は明らかにできなかったが、履修経験がない教員の存在が示された。指導に对しかなり不安を抱えていると思われる。

教員になってからの自身のダンス経験について、実技研修や講習会を含めてダンス経験が“あり”と回答した教員は、119人（63%）、“なし”が65人（34.4%）、不明が4名であった。日々の業務や部活動の指導等で多忙なため、研修も十分に行えないのではないかと考えられる。

#### 1-4. ダンス授業の指導経験

ダンス授業の指導経験年数について、回答欄に記入がなかった（空欄であった）教員を指導経験がなしとして扱った場合、ダンス種目毎の結果は図1a～cのとおりであった。

創作ダンスは、指導経験がない教員が74名（39%）、指導経験年数1～5年は67名（35%）、

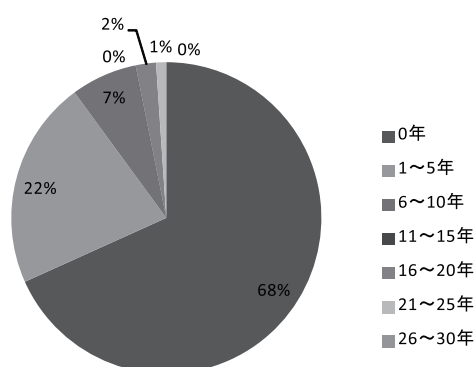


図1b 指導経験年数（フォークダンス）

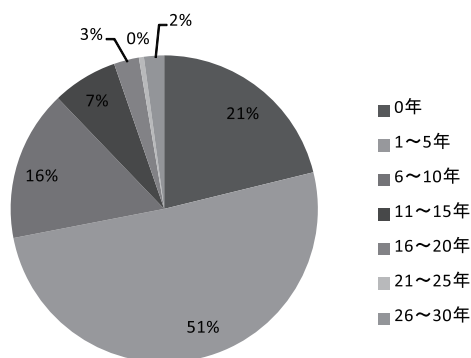


図 1c 指導経験年数 (現代的なリズムのダンス)

6～10年は22名 (12%)、11～15年は9名 (5%)、16～20年は9名 (5%)、21年以上は8名 (4%)であった。

フォークダンスは、指導経験がない教員が129名 (68%)、指導経験年数1～5年は41名 (22%)、6～10年は13名 (7%)、11年以上は6名 (3%)であった。

現代的なリズムのダンスは、指導経験がない教員が40名 (21%)、指導経験年数1～5年は96名 (51%)、6～10年は30名 (16%)、11～15年は13名 (7%)、16～20年は5名 (3%)、21年以上は5名 (2%)であった。

ダンスが必修となったが、ダンスの指導経験が全くない教員や指導経験が少ない (5年以下の) 教員が多数いることが明らかとなった。このことから、ダンスはこれまで授業として選択されることが非常に少なかったと考えられる。完全実施となった24年度に初めて指導する教員もいるのではないかとと思われる。また、ダンス種目毎に指導経験がない教員を性別で見ると、創作ダンスは男性教員全体の43%、女性教員の26%に指導経験がなく、フォークダンスは男性教員の71%、女性教員の57%に、現代的なリズムのダンスは男性教員の23%、女性教員の14%に指導経験がなかった。いずれのダンスに

おいても男性教員の指導経験が不足していることが明らかとなった。

## 2. ダンス授業の実態

### 2-1. 授業実施

調査時におけるダンス授業の実施について、実施済みの中学校が50%、これから実施する予定の中学校が50%であった。

### 2-2. クラス編成

ダンス授業のクラス編成について、1年生は共習が28%、別習が72%であった。2年生は、共習が24%、別習が76%であった。3年生は共習が26%、別習が74%であった。いずれの学年も多くが男女別で授業が行われている。おそらく他の運動領域が男女別習で行われていることからダンスも同じ形態で行われていると思われる。

### 2-3. 実施種目

実施ダンス種目について、学年毎に採択されているダンスを男女別に表2に示した。

1年生男子では、創作ダンスが33校 (26%)、フォークダンスが18校 (14.2%)、現代的なリズムのダンスが73校 (57.5%)であった。1年生女子では、創作ダンスが44校 (34.6%)、フォークダンスが21校 (16.5%)、現代的なリズムのダンスが76校 (59.8%)であった。2年生男子では、創作ダンスが17校 (13.3%)、フォークダンスが11校 (0.09%)、現代的なリズムのダンスが84校 (66.1%)であった。2年生女子では、創作ダンスが26校 (20.4%)、フォークダンスが14校 (11%)、現代的なリズムのダンスが102校 (80.3%)であった。3年生男子では、創作ダンスが14校 (11%)、フォークダンスが7校 (5.5%)、現代的なリズムのダンスが74校 (58.3%)であった。3年生女子では、創作ダンスが27校 (21.3%)、フォークダンスが9校 (7%)、現代

表2 学年毎のダンス種目実施数 (%)

	n=127(複数回答)					
	1年生		2年生		3年生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
創作ダンス	33(26)	44(34.6)	17(13.3)	26(20.4)	14(11)	27(21.3)
フォークダンス	18(14.2)	21(16.5)	11(0.09)	14(11)	7(5.5)	9(7)
現代的なリズムのダンス	73(57.5)	76(59.8)	84(66.1)	102(80.3)	74(58.3)	103(81.1)

的なリズムのダンスが103校(81.1%)であった。

全ての学年において現代的なリズムのダンスの採択率が他のダンスよりも高く、特に第2, 3学年の女子については約80%が現代的なリズムのダンスを採択していた。東京都の調査結果<sup>14)</sup>でも第2, 3学年女子の現代的なリズムのダンスの採択率(約66%)が他のダンスより高かったが、岐阜県はさらに高い採択率となっていた。

#### 2-4. 採択理由

採択の理由について、それぞれのダンスについて「表現する楽しさの体験」「踊る楽しさの体験」「運動文化としての体験」「生徒の興味・関心の高さ」「運動技能、表現技能の育成」「互いを認め合う態度の育成」「指導のしやすさ」「生徒の個性を尊重」「生徒の能力に適した運動」「時間時数との兼ね合い」「その他」から当てはまる順に上位3つを選択するよう求めた。

その結果、創作ダンスを採択した理由は「表現する楽しさの体験」が最も多く、続いて「運動技能、表現技能の育成」「互いを認め合う態度の育成」であった。

フォークダンスを採択した理由は「運動文化としての体験」が最も多く、続いて「踊る楽しさの体験」「指導のしやすさ」「互いを認め合う態度の育成」であった。

現代的なリズムのダンスの採択理由は、「踊る楽しさの体験」が最も多く「生徒の興味・関心の高さ」が続き、「表現する楽しさの体験」となっていた。

#### 2-5. 年代別にみた実施授業

年代別に実施される授業数をダンス毎に表3に示した。20代の教員によって合計57の授業が行われており、その内訳は創作ダンス33%が、フォークダンス14%が、現代的なリズムのダンスが53%であった。30代では合計79の授業が行

われ、創作ダンス36%が、フォークダンス16%が、現代的なリズムのダンスが47%であった。40代では合計100の授業が行われ、創作ダンス37%が、フォークダンス17%が、現代的なリズムのダンスが42%であった。50代でも合計100の授業が行われ、創作ダンス36%が、フォークダンス24%が、現代的なリズムのダンスが40%であった。

ダンスの授業数の合計は20代よりも30代、30代よりも40代・50代が多くなっているが、その内訳については、どの年代においても、フォークダンスの実施率が一番低く、年代が低いほど現代的なリズムのダンスの実施率が高い傾向にあった。

#### 2-6. 授業内容

実施した(実施予定の)ダンスの授業内容について当てはまるものを複数回答で求めた。各ダンス種目の内容を表4に示す。

創作ダンスの授業(全63授業)について、「動きや作品を見せ合って発表する」(55件)が最も多く、続いて「緩急強弱を組み合わせる多様な感じを表現する」(40件)「イメージを深めて簡単な作品にまとめる」(39件)であった。最も少なかったのは「ものを何かに見立てて表現する」(11件)で、続いて「変化と起伏のあるひとまとまりの動きで表現する」(19件)であった。第1, 2学年で求められている「変化と起伏のあるひとまとまりの動きで表現する」活動より、第3学年で求められている「イメージを深めて簡単な作品にまとめる」活動が多く行われている結果となった。このことから創作ダンスの授業では、作品づくりを中心に授業が進められ、その過程で動きに緩急強弱を付けて表現し、授業のまとめとして動きや作品を見せ合う活動が行われているのではないかと考えられる。

表3 年代別にみたダンス種目毎の実施数

	n=189(複数回答)		
	創作ダンス(%)	フォークダンス(%)	現代的なリズムのダンス(%)
20代	19(33)	8(14)	30(53)
30代	29(36)	13(16)	37(47)
40代	35(37)	16(17)	42(46)
50代	32(36)	21(24)	34(40)

表4 各ダンス種目の授業内容

創作ダンス n=63		フォークダンス n=29		現代的なリズムのダンス n=112	
内容	件数	内容	件数	内容	件数
対極動きの連続を組み合わせて表現する	30	外国の踊りを覚えて踊る	19	リズムに乗って全身で自由に弾みながら踊る	82
身近な生活や日常動作について表現する	36	日本の代表的な踊りを覚えて踊る	11	リズムの特徴をとらえて踊る	42
緩急強弱を組み合わせて多様な感じを表現する	40	地域に伝わる踊りを覚えて踊る	6	簡単な繰り返しのリズムで踊る	55
もの(小道具)を何かに見立てて表現する	11	踊りの隊形変化等を工夫する	4	リズムに変化をつけて踊る	32
空間の変化を群(集団)の動きで表現する	33	空間の変化を群(集団)の動きで表現する	2	仲間と動きを合わせたりずらしたりして踊る	64
イメージを即興的に表現する	29	覚えた踊りを授業内のみで踊る	2	変化のある動きを組み合わせて連続して踊る	41
変化と起伏のあるひとまとまりの動きで表現する	19	体育祭などの演技として発表する	6	アップやダウンなど体幹部を中心としたリズムの取り方の習得	46
イメージを深めて簡単な作品にまとめる	39			簡単なステップの習得	52
動きや作品を見せ合って発表する	55			ビデオ等による既成作品の模倣	75
				教師による既成作品の模倣	13
				動きを見せ合って交流する	79

学習指導要領解説において、創作ダンスでは、はじめの段階(第1, 2学年)では多様なテーマを設定し、動きに変化をつけてひと流れの動きで即興的に表現できるようにしたうえで、仲間とともに表したいイメージを変化と起伏のある「はじめ-なか-おわり」のひとまとまりの表現にして踊る。そして、進んだ段階(第3学年)では表したいテーマにふさわしいイメージをとらえ、グループを組み、個や群の動き、緩急強弱のある動き、空間の使い方や場面展開を工夫して、イメージを一層深めて、変化と起伏のある「はじめ-なか-おわり」の構成で簡単な作品にまとめて踊るとされている。しかし、今回の調査結果から、授業内容を学習指導要領解説の内容と照らし合わせるとずれが生じており、内容を十分に理解したうえで授業が行われていないことが推測される。

フォークダンス(全29授業)は、「外国のフォークダンスを覚えて踊る」(19件)が最も多く、続いて「日本の代表的な踊り」(11件)「体育祭等の演技として発表する」(6件)「地域の踊りを覚えて踊る」(6件)であった。日本の民謡や地域の踊りより外国のフォークダンスが多く踊られている結果となった。このことは小学校の履修内容と関係しているのではないかと考え

られる。小学校では運動会の集団演技として日本の民謡や地域の踊りが多く取り上げられていることからこの様な結果になったと推測される。

現代的なリズムのダンス(全112授業)は、「リズムに乗って全身で自由に弾みながら踊る」(82件)「動きを見せ合って交流する」(79件)「ビデオ等による既成作品の模倣」(75件)が多く、続いて「仲間と動きを合わせたりずらしたりして踊る」(64件)であった。このことから、単元の導入ではリズムに乗って全身で自由に弾みながら踊る活動が行われるが、その後はグループを組み、既成作品を手がかりとして模倣したりアレンジしたりして踊りをつくる授業が進められ、授業のまとめとして動きを見せ合う活動が行われていると推測できる。

学習指導要領解説において、現代的なリズムのダンスでは、既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではなく「リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせ、リズムに乗って全身で踊ること」が内容として示されているが、今回の調査では「リズムの特徴をとらえる」や「変化のある動きを組み合わせる」活動が十分に行われておらず、「ビデオ等による既成作品の模倣」が多く行われていることが明らかとなった。

### 3. ダンス指導に対する教員の意識

#### 3-1-a. ダンス指導の難しさ

ダンスの授業を行うことに対してどの位難しいと感じるかについて、「とても難しい・どちらかという難しい・どちらでもない・あまり難しくない・難しくない」の5段階で回答を求めた。結果を図2a～cに示す。

創作ダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した教員は、128人(73.1%),「どちらでもない」が27人(15.4%),「あまり難しくない・難しくない」が20人(11.5%)であった。多くの教員が創作ダンスの指導は難しいと感じていた。

フォークダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した教員は、75人(42.9%),「どちらでもない」が46人(26.3%),「あまり難しくない・難しくない」が54人(30.8%)であった。

現代的なリズムのダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した教員は、99人(56.5%),「どちらでもない」が37人(21.1%),「あまり難しくない・難しくない」が39人(22.3%)であった。

#### 3-1-b. 性別から見たダンス指導の難しさ

ダンス指導の難しさについて性別で見ると、男性教員の場合、創作ダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した教員は、107人(78.7%),「どちらでもない」が19人(14%),「あまり難しくない・難しくない」が10人(7.3%)であった。男子教員の8割近くが創作ダンスの指導は難しいと感じていた。

フォークダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した男性教員は、62人(45.6%),「どちらでもない」が37人(27.2%),「あまり難しくない・難しくない」が37人(27.2%)であった。

現代的なリズムのダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した男性教員は、113人(61%),「どちらでもない」が27人(19.9%),「あまり難しくない・難しく

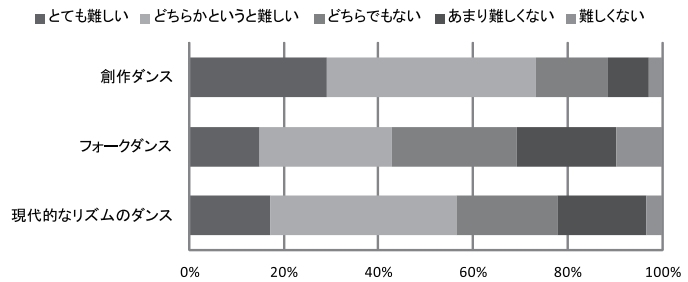


図2a ダンス指導の難しさ (n=175)

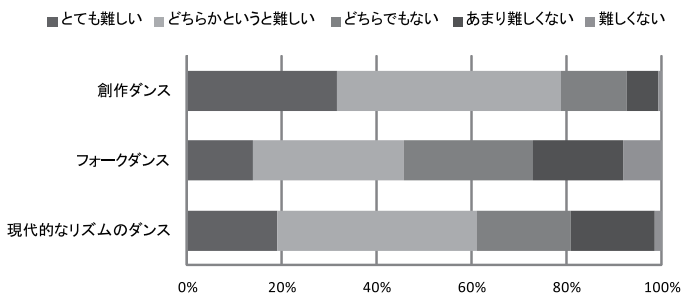


図2b ダンス指導の難しさ (男性n=136)

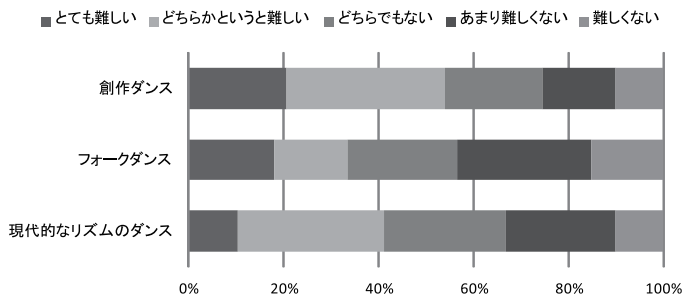


図2c ダンス指導の難しさ (女性n=39)

ない」が26人(19.1%)であった。6割の男子教員が現代的なリズムのダンスの指導は難しいと感じていた。

女性教員の場合、創作ダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した教員は、21人(53.8%),「どちらでもない」が8人(20.5%),「あまり難しくない・難しくない」が10人(25.7%)であった。半数以上の女性教員が創作ダンスは指導が難しいと感じていた。

フォークダンスについて「とても難しい・どちらかという難しい」と回答した女性教員は、13人(33.3%),「どちらでもない」が9人(23.1%),「あまり難しくない・難しくない」が17人(43.6%)であった。

現代的なリズムのダンスについて「とても難しい・どちらかというとな難しい」と回答した女性教員は、16人(41.1%)、「どちらでもない」が10人(25.6%)、「あまり難しくない・難しくない」が13人(33.3%)であった。

3つのダンスのなかで指導が最も難しいと感じているのは創作ダンスであり、男性教員については8割近くが難しいと感じていた。

### 3-2. ダンス指導の難しさの理由

難しいと感じる理由について選択肢から3つを選び、最も当てはまる理由に◎を付け、◎を重みづけして2点とし、その他を1点として点数化した。(図3)

点数の高かった項目の順は「指導方法がわからない」「自分が上手く踊れない」「評価が難しい」「指導内容がわからない」「題材・曲選びがわからない」「生徒が嫌がる」「自分がダンスは嫌い」であった。

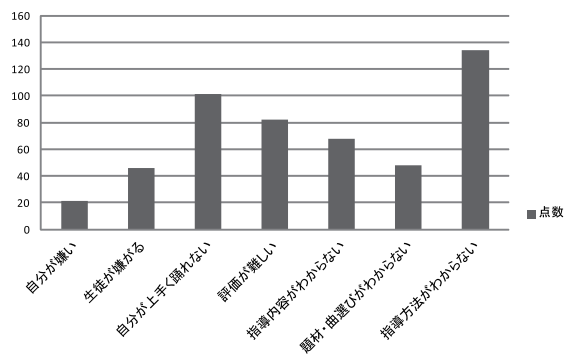


図3 難しいと感じる理由 (n=153)

ダンスの学習は、いま・ここから創り出す問題解決学習(ゴールフリーな学習)<sup>9)</sup>であり運動習得学習に軸足を置いていない。そのことが学習内容と指導方法をわかりにくいものにし、指導が難しい理由になっていると思われる。

### 3-3. 教員の要望

ダンス授業を行うにあたっての教員の要望を複数回答で尋ねたところ「すぐに使える教材が欲しい」(135件)、「参考になる資料が欲しい」(103件)、「授業を参観できる機会を増やして欲しい」(52件)、「実技研修の機会を増やして欲しい」(51件)、「ダンスが指導できる教員・非常勤講師の配置」(41件)、「大学時に実践で使える授業を」(14件)であった。

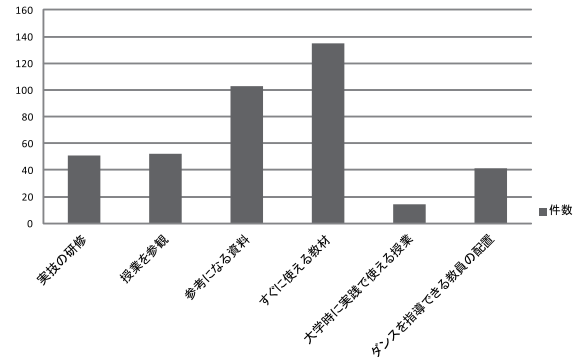


図4 教員の要望

ダンスが必修になったが、これまでのダンス指導経験不足からどのように指導してよいのかわからず、すぐに使える教材や資料も求める声が多く、指導に対する不安がうかがえる。

今後、指導に自信が持てない教員が「やれそう」「やってみたい」と思えるようなすぐに使える典型教材の提供や新たな教材開発を行うこと、授業の参観や実技研修の機会を確保することが教員のダンス指導経験を補う意味でも、重要な課題となってくるだろう。これまでに現職教員と共同で表現運動の教材開発<sup>9)</sup>と現代的なリズムのダンスの教材開発<sup>1)</sup>が行われてきたが、広く実践されるまでには至っていない。

以上の結果をまとめると、ダンス指導経験が全くない教員や少ない教員が多く、ダンス指導については自信がなく、特に創作ダンスの指導は難しいと感じていることがわかった。そして、ダンス授業は、指導がしやすいと思われるフォークダンスより、生徒の興味関心が高くて踊る楽しさ体験を重視した現代的なリズムのダンスが多く取り上げられていた。しかし、授業内容は既存の振り付けや作品を模倣することなどが含まれており、授業の特性を十分に理解しているとは言えない。創作ダンスについてもグループでの作品づくりが行われており、指導場面の少ない授業が行われていないか危惧される。指導内容と方法の不明確さからすぐにつかえる教材や資料を要望していることが明らかとなった。

## IV. 結論

岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状について調査したところ以下のことが明らかとなった。

- ・ダンス指導経験が全くない教員と指導経験が少ない(5年以下の)教員が多数いた。また、自身のダンス経験がない教員もいた。
  - ・教員はダンスの指導を難しく感じ、特に創作ダンスについては男性教員の8割が女性教員の5割が難しいと感じていた。
  - ・創作ダンスについて、多様なテーマについて表現する活動よりイメージを深めて作品をつくる活動が行われており、授業内容を見直す必要性が示唆された。
  - ・現代的なリズムのダンスについて、他のダンスよりも授業採択率が高かった。第2, 3学年の女子では8割を超えていた。しかし、ビデオ等による既成の振り付けや作品の模倣が行われているところが多く、学習の質が十分に保障されていないことが示唆された。
  - ・フォークダンスについて、授業採択率が低く、指導経験のない教員が多かった。
- 以上のことから今後の課題として以下のことが挙げられる。
- ・ダンス学習内容と指導方法の改善が急務である。ダンス授業の特性を十分に理解し、県独自のダンス指導方法と学習指導要領の内容をすり合わせていく必要がある。
  - ・ダンス授業の参観やダンス講習会参加の機会を増大することが望まれる。そのことにより典型教材の伝達をはじめ情報収集や教員自身のダンス経験が期待でき、それが指導力の向上につながる。
  - ・教員養成の大学においてはダンス授業内容の見直しを図り、指導力を身に付けた学生を現場に送り出すことが求められる。

#### 【謝辞】

本研究の調査にあたり、岐阜県中学校の保健体育科教員の諸先生方には快くご協力を賜りましたこと心より感謝いたします。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 浅野愛美・熊谷佳代(2011) 中学校ダンス必修化に対応した「現代的なリズムのダンス」の教材開発,岐阜大学教育学部研究報告書(教育実践研究) 13:55-67
- 2) 細川江利子(2012) 必修化となった今、舞踊研究会が果たすべき役割, 舞踊教育学研, 15:1-2.
- 3) 伊藤恵子・熊谷佳代(2009) 小学校における表現運動の実践的研究 - 技能に関する評価表と規準達成のための指導事例について -, 舞踊教育学研究, 11:11-22
- 4) 片岡康子編者(1991) 舞踊学講義, 大修館書店.
- 5) 松本千代栄 監修・編集(1992) ダンスの教育学, 第1巻ダンス教育の原論, 日本教育書籍.
- 6) 松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子・佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子(1994) 現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討, 舞踊学, 16:12-23
- 7) 文部省(1989) 中学校学習指導要領, 76-81, 大蔵省印刷局, 東京.
- 8) 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編, 118-130. 東山書房.
- 9) 村田芳子(2008) 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは? - 学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ -, 体育科教育, 56-3:14-18, 大修館書店.
- 10) 村田芳子(2007) 表現運動・ダンスの学習内容について考える, 体育科教育, 55-5:35-39, 大修館書店.
- 11) 中村恭子・浦井孝夫(2005) ダンス領域内の種目採択に影響を及ぼす要因の検討 - 創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較 -, 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 第9号:11-20.
- 12) 中村恭子(2009) 中学校ダンスの男女必修化の課題 - 中学校教員を対象とした調査にもとづいて -, 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 第1巻第1号(通巻第13号):27-39.
- 13) 中村恭子(2009) 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容 - 平成19年度, 20年度, 21年度および24年度の年次推移から -, 日本女子体育連盟学術研究, 26:1-16.
- 14) 中村恭子(2010) 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望 - 東京都公立中学校を対象とした調査から -, 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 第1巻第4号(通巻第16号):472-485
- 15) 七澤朱音(2010) ダンスの教材づくり・授業づくり, 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田清(編), 新版体育科教育学入門. 大修館書店.
- 16) 成瀬麻美・寺山由美(2011) 高等学校教員のダンス授業に対する意識について - 授業内容に着目して -, 舞踊教育学研究, 13:1-11
- 17) 高橋和子(2012) 創作ダンスで身につける「技能」とは何か, それをどう評価するか, 体育科教育, 60-2:28-31, 大修館書店.